



東高だより

はなみずき

第3号
(H23.4.28)

「幸福の色」

幸せの色は？ と聞けば、たいいていの人少し頭をひねって「青」かなと答える。これは多分メーテルリンクの幸せの鳥から来るのだろう。チルチルとミチル。そうあれだ。

唐突だが私はテレビは嫌いだ。作為が多すぎる。だからニュース以外あまり見ないことにしている。正体不明とも思われるタレント軍団が公共の電波をハイジャックしているのがそもそも気に食わない。民放は宣伝なくして存続なしとはいえ、昨今のテレビ番組、特にバラエティー番組にいたってはメディアの使命をすっかり忘れていやしまいか。スタジオでワイワイガヤガヤ自分たちだけが楽しんで、はっきり言って低俗極まりない。(おっさんそんなにカッカするなって)

話が逸れたが、テレビ嫌いの私が、つい先日新聞のテレビ欄を見ていて、えっそうなの、としげしげと見入ったことがあった。その晩は一步も二歩も譲って、久しぶりにテレビの前に腰を据えることにした。

私はその映画をこれまでに20回以上は見たと思う。もうそんなに見たら、すべての場面を熟知していて面白さ半減じゃないの。ところがどっこいこの映画についてはそうじゃない。

「幸福の黄色いハンカチーフ」これが映画のタイトルだ。本当かどうか知らないが、原作はアメリカと誰かが言っていた記憶がある。とにかくアメリカでも何でもいい、山田洋次監督が作ったその作品は私のハートをむぎゅつと驚つかみにしてしまった。大学を卒業して教員に成り立ての頃だった。大好きな高倉健主演とあって、年次休暇を取っていそいそと映画館へ足を運んだ。銀幕に「終わり」の文字が映し出されたとき、目は完全に涙に水没していた。館内の電気が意地悪く点灯し、観客の多くが涙の処理にこまっているとき、この私も隣のおばちゃんに気づかれぬように、強気を装って天井を眺めたのを覚えている。要するに感動したのだ。うん、これぞ映画だ、と。それがこの作品だった。あれから30年以上の歳月が流れたが、男と女の愛のテーマにおいて、私の中ではこの作品を越える映画は数少ない。小説では福永武彦氏の『草の花』があるが……。

主演は高倉健と倍賞千恵子。それと脇役を演じながらも彼らもある意味主演だったと思われる桃井かおりと武田鉄矢。このクラシックなコンビと現代版おちゃらけコンビが繰り広げるユーモアとペースが見事なタペストリーを織りなす。大仰だが私はあの映画の中に日本人でなければ理解できない「愛」の本質を見たような気がした。ぐっと腹に力を入れて耐える愛。今なら「いつまで一人の女にこだわる。いじいじしたって仕方ないんだよ。別れたら次の人」それが今流のやり方さ。そう言われそうだが、でも違うな、と断言する。人を愛することに昔も今もない。ナウイもくそもない。あるのは本気かどうかってことだ。愛のために命を賭すことだってあるのだ。

「俺を許して待っていてくれるなら、鯉のぼりの棹に黄色いハンカチを吊しておいてくれないか。出所する前にそう手紙に書いたんだ」高倉健の台詞だ。若い二人の後押しでかつて二人で暮らした家に向かう。悲哀をにじませる夕張の炭鉱風景、落盤事故のシーンが回想として映し出される。途中、ハンカチがあるわけないんだ、と弱気になり引き返そうとする主人公。そしていよいよラストシーン。高倉健演じる元殺人囚が、黄色いハンカチーフ、それも何十枚というハンカチーフが風にはためいているのを目にするシーン。これを見たとき涙せずにおれなかった。

色彩学ではどうなっているか不勉強だが、ブルーは落ち着きすぎて胸に矢を放ってこない。純粋なイメージはあるが、英語で「滅入った」という意味もあるくらいだから、目に飛び込んでくる黄色の強烈な明るさには叶わない。映画の中で、もしブルーのハンカチーフが使われていたら30年前の感動はなかったのではないか。以来、黄色は私の中では「幸福の色」となっている。

自分を愛してくれた人に対して、また愛した人に対して、「今でもあなたのことが大事。好きです」と言えればどれほど幸せであろう。高倉健の翳りある男臭い表情と、なぜこの人にはこういった表情があるのだろうと思わせる倍賞千恵子の淋しそうで清らかな美しさが、「人を愛することの重み」を考えさせてくれた。

当然、今回も涙した。いい映画は色褪せないね、本当に。テレビもまんざら悪くないじゃないか。素直に礼を言っておこう。

ところで、そういうお前さんには忘れられないくらい愛した人がいるかって？ それは秘密。

